

【総合的な学習の時間】提案

学び続ける子どもを育てる

— “ほんまもん” 体験を通した学びを伝え合う活動を通して —

1. 研究テーマ設定の理由

総合的な学習の時間（本校では総合的な学習の時間を「そうごう」といい、以後、そうごうとする）は、子どもたちが自らで課題を設定して解決する学びを繰り返し行っていくことである。

学校提案では、対象・他者・自己の3つとの対話を行い、それぞれの認識を更新することによって学びの質の高まりをめざすと述べている。そうごうでは、これら3つの対話の過程においてかかわり方に着目し、図1で示している「対象とのかかわり方」、「社会や他者とのかかわり方」、そして「自己とのかかわり方」を学んでいく。

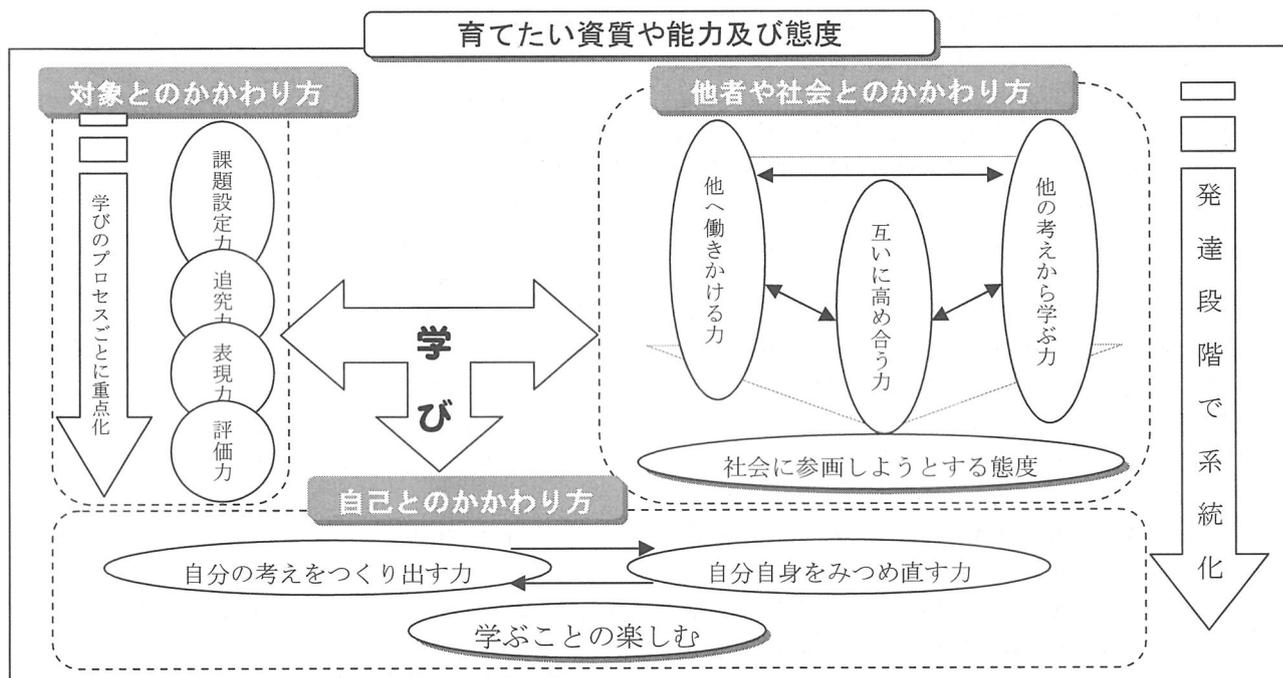


図1 「そうごう」における育てたい資質や能力及び態度

まず対象と出会い、そして対話の過程において「対象とのかかわり方」を学んでいく。そのとき、他者とのかかわり、さらには社会とのかかわり（「他者や社会とのかかわり方」）ながら自己の変容（「自己とのかかわり方」）を認識していく。このことを繰り返していくことがそうごうにおける研究のテーマである「学び続ける子どもを育てる」ということになる。

「学び続ける子どもを育てる」ためには、子どもたち一人ひとりが切実感をもち、達成感が感じられる活動が必要である。そこで、自然、人、社会の本物とかかわる体験を多く行い、そこから本物を知り、そして自らの学びを自分たちだけの中で終わらせるのではなく、社会のためになり、社会を動かし、本物にしていく。これが“ほんまもん”体験であり、これらを通した学びを子どもたち一人ひとりが伝え合う活動によって学びの質の高まりをめざしていく。

このようにそうごうでは、生涯にわたって学び続ける礎を築くことを目標としている。

2. 「そうごう」における「学びの質の高まり」

「そうごう」における「学びの質の高まり」とは、学んでいく過程において、子どもたち自らが乗り越えるべき壁を設定することができたときにおこるものである。この壁とは、子どもたちが互いの長所や弱点、そして今おかれている状況などを活動していく中で理解し、高すぎず低すぎず、挑戦していこうという意欲をもって取り組むことのできる課題となるものである。そのためには、先に挙げた「対象とのかかわり方」、「他者や社会とのかかわり方」、「自己とのかかわり方」といった育てたい資質や能力及び態度のバランスを考え、意識しながら単元構成、カリキュラム開発を行っていかなければならない。その中において、本研究では、特に“ほんまもん”体験を通した学びを伝え合う活動を中心に学びの質の高まりを図っていく。ここでの伝え合う活動とは、体験を通した内容を知的に省察し、伝える相手を意識した意味付けを行い、それらを他者へ発信し、そして他者からの情報を受信することによって新たな課題等を見出すことである。この伝え合う活動を重点的に行うことによって、他者からのアドバイスやかかわりによって自らの課題に気付く、自分なりの壁を築いていくことができると考える。

3. 研究の展望

(1) 伝え合う活動を充実させるための工夫

昨年度、対象に対して子どもたち一人ひとりの深まりは大いにみられたが、課題としてその深まりを互いに共有していくことがあまりみられなかった。自らの学びを発信することで満足し、他者とのやりとりはあったが深まりは少なかった。そこで、本研究では自らの学びを伝え合う活動をクラスという枠を超えた人々とかかわりを設定することで、自分たちのことを伝えるために切実感をもって、よりクラス内での友だちとのやりとりが多くなるを考える。特に相互評価を取り入れた活動を多くもち、追究してきたことに関して常にグループを中心としたメンバーに対して発信する機会を設ける。そのときの評価規準については子どもたちとともに作成し、ゴールを明確にした活動にする。

(2) 各教科等との関連を意識したカリキュラム開発

今、「生きる力」が求められている。変化の激しいこれからの社会を生きるために、社会に対して疑問をもち、様々な矛盾に気付く、そして新しい社会を築いていこうとする態度が必要であり、「そうごう」で身に付けた力は「生きる力」であると考え。この「生きる力」をはぐくむためには、総合的な学習の時間で行われている体験的な学習や課題解決的な学習はますます重要である。しかし、これらの学習のためには、各教科で知識・技能を活用する学習活動を充実することが必要である。これにより、各教科等での学習を踏まえ、総合的な学習の時間における教科等を横断した課題解決的な学習や探究活動の質的な充実を図ったカリキュラム開発を行っていく。

4. 成果と課題の把握と手だて

身に付けたい力についての調査を事前、事後に行い、子どもたち自身の中でどのような変容がおこったのかを把握する。子どもたちのそれぞれの学びの傾向を分類し、①活動内容、②活動場面（特に伝え合う活動場面）、③友だちとかかわり方、④自己評価、⑤他者評価によって検討を行い、学びの質の高まりの様子を把握し、カリキュラム評価を行う。